それは、まさに、音楽の魂が蘇った瞬間だった！
名匠、武沢茂エンジニアのマスタリング＆カッティングの技。

日本コロムビアのチーフエンジニア武沢茂さんが丹精込めてカッティングしたラッカー盤を聴くことができたのは、わたしのオーディオ人生においてエポックメイキングな出来事だった。過去にオーディオショーのデモンストレーションなどでラッカー盤の音を聴く機会はあった。しかしそれらはいずれも、すでに何回か針を通したもので、カッティングされたばかりの、未再生のラッカー盤を聴くのは初めての経験だった。しかも、武沢さんがいつも座るコンソール前のミキサー席で聴くという、得難い体験をさせていただいた。

テストカットされたラッカー盤がセットされたノイマンVMS70カッティングレースには、DENON DL103カートリッジが装備されていた。武沢さんが慈しむように針先をラッカー盤に降ろすと、スピーカーのまわりを静寂が支配する。楽音が立ち上がるまでの数瞬は、サーフェスノイズがいっさい感知できない、針先が音溝を擦っていることすら信じられない、無音の世界……そこにいきなり、玉置浩二のヴォーカルが炸裂する。思わず身体に震えが走った。それは、まさに、音楽の魂が蘇った瞬間だった！

このラッカー盤試聴の3週間ほど前、東京・南麻布にある日本コロムビアのマスタリングスタジオで、今回のレコード制作を担当された武沢茂さんの仕事の一部始終を取材させていただいた。

制作工程は、①ユニバーサル ミュージックが厳重に保管するマスターテープをスチューダーA80アナログテープ再生専用機でプレイバックする。②日本コロムビア製カスタムメイドのアナログミキシングコンソールで音質調整。③コンソールからdCSのA/Dコンバーター902を経て、同社カスタムメイドDAWに、PCM96kHz/24bitでアーカイブする。これで今回のカッティングマスターが完成する。

作業の流れを整理してシンプルに書いたが、たとえばアナログマスターテープは、制作されてから30年近く経過しているため、テープの状態を安定させると同時に、再生にまつわる磁性体剥離などのトラブルを回避するために、数十度に温められたオーブンに数時間入れられ、加熱除湿してから再生する気の配りようだ。

今回のレコードには『安全地帯Ⅱ（1984年5月）』『安全地帯Ⅲ～抱きしめたい（1984年12月）』『安全地帯Ⅳ（1985年11月）』『安全地帯Ⅴ（1986年12月）』『安全地帯XIII JUNK（2011年11月）』の5枚のアルバムから10曲が選曲されているが、デジタルマスターとなる「メロディー」1曲を除き、記録媒体はすべて¼インチ幅アナログテープで、38cm/secスピード2トラックで録音されている。マスターテープは、アルバムごとに録音状態が異なるため、1曲ごとにスチューダーA80の再生ヘッドのアジマス調整を繰り返して、本来の再生音を確認していく。その上で、曲ごとに緻密なマスタリング作業がおこなわれるのだ。

安全地帯のアナログマスターを聴くなど初めての経験だったが、往年のアナログ録音テープの音のよいことには驚嘆した。ベテランエンジニアの手で丁寧にメインテナンスされたスチューダーA80再生専用機は、現代のデジタル機器とは異なる、アナログにしか求めることのできない、屹立した再生音の世界を聴かせてくれた。なんという安定感、低域の伸びのよさ！

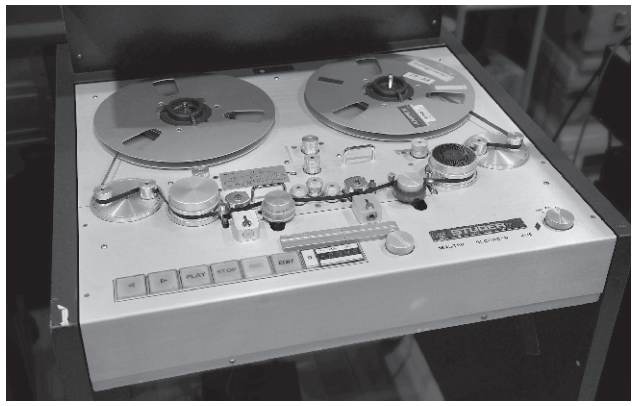
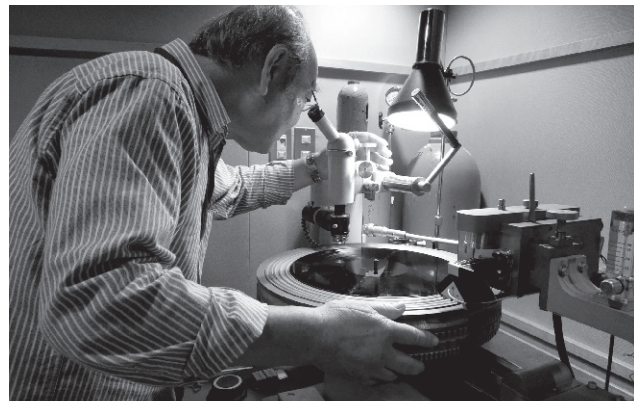
しかしこの音が、武沢さんの手にかかると、よりいっそう魅力的に生まれ変わるのだから驚いてしまう。曲を聴きながら、武沢さんがアナログコンソールのツマミをわずかに操作した途端、まるで眠りから覚めたように、音楽が活き活きと躍動し始める。それは、マスターテープに武沢さんが、新たな生命を吹き込んでいく作業のように感じられた。

武沢さんは「当時のレコード用に制作されたさまざまな楽曲には制約も多く、マスターテープといえども、アーティストやエンジニアが意図したとおりの音に仕上がっているとは限りません。録音エンジニアの意図した音を理解し想像して、そこに少しでも近づけようと努力するのがわたしの役目です」とおっしゃるが、その言葉からは音にかける覚悟が伝わってくる。

完成したPCM 96kHz/24bitカッティングマスターは、④dCSのD/Aコンバーター952でアナログ信号に変換し、⑤アナログミキシングコンソールで最終的な音質の微調整を施した上で、⑥ノイマンのカッティングアンプSAL74Bを経由し、ノイマンVNS70カッティングレースに搭載されたSX74カッターヘッドでラッカー盤にグルーブを刻んでいく。この過程においても、最終製品となるアナログレコード盤がもっともよい音になるように音質調整を繰り返すというから驚く。わたしは唯々ラッカー盤の音に驚嘆していたが、武沢さんは「ラッカー盤を最終品として聴くならこのままでもいいが、製品としてプレスされたレコード盤に仕上げるためには、まだまだ細かな調整が必要」と淡々とおっしゃる。試聴用にベストカットのテストラッカー盤を仕上げて、プレスした盤でも同じイメージの音になるよう、最終のプレス用本番ラッカー盤をカッティングするというのだから、その執念には頭がさがる。

カッティングの音源にアナログではなくデジタルを使う理由は「アジマスひとつをとっても、アナログマスターの状態がすべて違うので、たとえオリジナルテープから1曲ごとに切り出して繋いでも、アジマスは曲ごとに異なり、音質にもバラつきが出てしまう。それなら1曲ごと完璧に調整した最高の状態で再生して、DAWにアーカイブした方が、すべての曲が最良の状態で記録できる」とのことだった。

今回のアルバム制作において武沢さんは、マスターサウンドのダイナミックレンジを最大限生かし、生々しく微細なニュアンスをレコード化するため、あえてコンプレッサーは使用していない。また、片面の収録時間も20分程度とすることで、カッティングレベルの制約を最小限に抑え、高域低域とも充分余裕をもった溝幅でカッティングしている。

武沢さんが仕上げたプレス用の本番ラッカー盤は、この後、東洋化成に送られ、ラッカー盤から直に起した最初のメタル原盤から、180グラム重量盤レコードとしてプレスされる。その仕上がりは、いま、貴方がお聴きのとおり。新たな名盤の誕生を歓びたい。

文：黛 健司